
空の果て

草薙響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の果て

【Nコード】

N02550

【作者名】

草薙響

【あらすじ】

草薙の綴る詩集。テーマはなく、ただ、ふと誰かに伝えたくなくなったものを書き留める場所。誰かが、これを読んで共感してくれれば嬉しいなんて、そんなことを思いつつ。

浮游

何処までも広がるこの場所で

私は浮かんだままでいよう

足元すら覚束ぬこの場所で

私はあなたと共にいよう

あなたが私に微笑むのなら

風に溶けた砂糖菓子のような香りを抱いて

私もあなたに微笑もう

突風が吹き、あなたが見えなくなろうとも

繋いだ指先に祈り続けて

あなたの熱さを感じていよう

雨雲が流れ、水滴が全てを落とそうとも

あなたに溺れたこの私が

溺れることもないだろう

あなたがいるのなら

足元など意味をなさないので

私はここにいるのだと

あなたが教えてくれるから

浮いていよう

あなたと二人

それ以外のない
中空の場所で

『浮游』

未知

私を知らない貴方がいて
私の知らない貴方がいる

私はあなたを知っていて
あなたも私を知っている

あなたであれ、貴方であれ
それが私にとって大切であることに
何ら変わりはないけれど
それでも時々、怖くなる

あなたの見る私
それは私に違いない
けれども果たしてこの私は
あなたを見ることが出来るだろうか
貴方を知ることが出来るだろうか

答えはでない
それすらも掴めない
靄のような陰の中

私は沈む

何かを求めて
沈み行く

何を落としたのかも
分からないのに

『未知』

夢色

薔薇色の明日がほしいと、願うことはない

例え願いが叶おうとも、その先までもが同じ色ではないだろうから
そうであっても、一色の中で流れるのは窮屈であるから

故に私は望まない

海に沈むような深い碧であれ

炎に焦がれるような激情の紅であれ

森に抱かれるような安らぎの翠であれ

私を満たすことはない

極彩色の中に佇み

人の色に染まるフリをする

艶やかでありながら虚しい極楽鳥の翼の内に

私の色を潜ませて

誰かに侵されるのを

私は良しとしない

此処にいる自分が私であるし

この手にある色が私だから

私は私の色を持つ

それを作るのは私だけ

けれどもあなたが零したインクは
滲みと一緒に溶けていく
私の中に、あなたと共に

誰もを弾いた油の色は
いともたやすく染められた
あなたの色は、すぐに私の色になった

まるでまぶたを閉じたとき
脳裏を掠める色のような
懐かしいような新鮮なような

何処にもない
けれど確かに存在する

私とあなたの色

いつかこの色を
誇って二人微笑めたら
幸せだろうね

『夢色』

迷宮

何処にもない場所で

私は息をするらしい

いや、私は

最早息などしていないのか

閉ざされた場所で

誰にも会わず

ただ自身の感覚だけを頼っている私に

正常な判断ができるはずもない

この場所は、薄暗がりではなく明るいのではないか

この身体は、既に朽ち果てて存在すらしないのではないか

この声は、他の誰にも聞こえていないのではないか

この瞳に映るものは、

私しか知らない

当然だ

息をすることを

やめることも

もう飽きた

自分が何をしているか

誰かが確定してくれるのなら

私は楽になれるのだろうか

否

人のいない此処で

そんなことを考えることは馬鹿馬鹿しい

誰もいないのだ

自身を捨ててまで

私を救う者などおらぬのだ

当たり前である

私は何故いるのか

そんなことを思考するのは

鶏と卵よりも面倒な愚の骨頂

それを分かっているながら

私はそれを止めはしない

何かを考えていないと、この瞼は落ちてしまっただろうから

それともいつそ

このまま目を閉じた方が

いいのだろうか

誰もいない

この閉ざされた場所で

露天

隔たりのない
何処までも続く空を見上げて
私は息をつく

空はつながっているというが
果たして本当にそうなのか
知っている者はいないだろう

何処かに空の切れ目があつて
縫い付けられているのではと
風に揺られながら思考した

雨も空も平等だ
土も光も平等だ
ならば何故、私たちは平等でないのか

誰しもが思いつくであろう簡単な解答を
敢えて私は口に出さない
それを述べたところで
私は意味など見つけられないのだから

風が吹く
止まったままの私を急かすように
彼らは笑う

人の子とは愚かなものよ
そう言つて、彼らは飛んでいく

私も笑う

その通り、人の子とは愚かな生き物よ
誰もいない空を眺めて
ぼつり

空も海も平等だ
土も雨も平等だ

ただこの場にいる生き物の心ばかりは
決して平等にはならないのだ

『露天』

温度

気付いたら、私は虚空を眺めていた
そこには誰かがいたはずで
私の知る場所にいたはずで
けれども私は、その人を
知らないフリをする

不器用だねと周りは笑う
その通りだと、私も笑う
みんな、不器用なんだと

誰かがいたはずの場所
今は空いている場所
そこには誰かがいたはずで
そこには誰かがいるはずだ

けれども誰かは
いないのだ

スツと通り抜けていく沈黙
誰かの言葉を待ったまま、止まる
私は笑う
誰もいないのに返事を待つのかと

残酷かも知れない

無慈悲かも知れない
けれど誰かが

そう言つて笑わなければいけないから

ならば私が笑うだけ

お節介でも要らぬ世話でも

私はやりたいようにしよう

だから

君もやりたいように

すればいいのさ

不器用なんだね

私らみんな

けれども不器用は不器用なりに

わかることがあるのさ

誰かのいない場所は

まだあたたかいから

大丈夫

戻ってきても

あたたかいさ

そして

不器用なりに

誤魔化しながら

笑おう

このぬくもりに
身を任せて

『温度』

篝火

誰もいない場所で
ひとり目を閉じる
閉じているのかさえも分からず
それでも、目を閉じる

何も見えない暗闇で
目を開けることは果たして
目を閉じること
どう違うのだろう

手元を照らすような
灯りが欲しかった

何処にあるかは分からない
何処にもないのかも知れない
それでも
いつだったか遠い日に見たあの灯りに
思いを馳せずにはいられない

静かに
風の吹かない
揺らぎのない場所

足元に落ちた火の粉を
私は踏んで

泣いていた

愚かだと笑い
罵ってくれる者さえ
いない場所だった

『篝火』

深紅

私は誰かのためじゃない

私のためにいるんだと

言い聞かせては

自嘲した

私は私

他人は他人

けれど私のどれだけが

他人でできているんだろう

一体私のどれだけが

他人をつくっているんだろう

いつだって

この世界に色はない

色はもとからあるものではないし

そんな色なんてつまらない

誰かが白だと言っても

私が黒だと思えば

それは私にとっての黒

このまっさらなキャンバスに

誰かが誰かの色を塗る

あなたはあなたの色を
君は君の色を

私は私の色を

全てを焼き尽くすような
そんな絵の具に身体を浸して

私は笑おう

私の色は燃えている

嗚呼、この場の色は！

『深紅』

罪空

みんなの空なんてないんだと
気付いたんです

だってみんなの空ならば
僕が見上げることなんて
できるはずがないから

けれども空はあって
この僕を見下ろしていて
笑うんです

だから僕も
笑うんです

空はみんな
みんなが眺めて
違うことを思う

綺麗だとか
汚いだとか
青いだとか
白いだとか
灰色だとか
無色だとか
優しいだとか
怖いだとか

みんながみんな
自分の上に在るだけの
不思議な形をしたモノに
想ってしまふ

僕は

あの子の隣で
あの子の空を
眺めたいだけ

けれどもそんな
おこがましい

恐ろしいことは
望んではいけない

僕は
いつだって

この空に
似ても似つかないあの子を探してしまうのだから

あの子はいつも
僕の中で咲き誇って
時にはしおれて

僕だけのために手折ってしまいたくなるような
恐ろしいほど美しく眩しい

あの人と同じ空を

眺めようと決めたあの日に

僕は歪んでしまったのかも知れない

けれど

それこそが

とても素敵で

幸せなこと

あの人の上に在る空は

いつまでもあの人を

見守ってくれるでしょうか

今の僕の空は

深く淀んでいて

今にも

堕ちてきそうだけれど

『罪空』

眠り姫

色で溢れた世界に
疲れた子はおやすみ
怖くないから
目をお閉じ

知らない間に
周りは変わっていくかも知れない
そうだね
けれど誰かが、
待っているでしょう

そんなことはないわ
そうは言わずに、
横におなり
大丈夫

私は此処で、共にいるよ

永遠なんてないから
ずっと待ってるなんて
出来るはずないもの
そうだね
永遠なんてない
だから、
永遠に帰ってこない人
なんていないんだよ

分からないわ

それでいいのさ
今はただおやすみ

我慢も大事だ
けれどそれは、
苦しく生きていく
我慢じゃないんだ
少し、休憩する我慢

休んでいるのは
楽じゃないね
辛いだろう
苦しいだろう

けど、我慢するのさ

いつか、我慢が我慢じゃなくなって
のんびり静かに
休めるときがきたら

じつと
おやすみ

そして休み終わったら

また
目を開けて

笑うといいよ

『眠り姫』

星影

足元に映る自分に
微笑んで歩く

地に映るあなたに
そつと私を重ねる

あなたの知らない
小さな私の幸せ

いつだって
もう一人の私を連れて
歩かなくちゃいけない

窮屈であるし
忘れないこと
忘れてしまえば
楽になれること

けれど私は
全部を合わせて私だから
連れて歩く
地に沿う私を

あなたと空を見上げて

二人で微笑んだ

この光は

もしかしたらもう、

消えているのかも

知れないけれど

消えていても綺麗だと

言う私たちがいるんだ

不思議だね

けど、普通なこと

気にする人なんていない

いても変わらない

不思議なこと

いても変わりがないなら

それはもう

不思議じゃないのかな

地に沿う私と

空を輝く光と

同じなのに

どこか違う

不思議でないのに

不思議に見える

それはきつと
私がそう望むから

世界のみんなが不思議で
世界のみんなが普通

普通と不思議の違いは
分からないけれど
そういうものだよ

多分
きつと

私は今日も
手の平を空に翳して

物思いに耽る

私の普通で
ただど誰かには

不思議なこと

枕元

少し系のほつれた
アヒルの人形
潰されて抱かれて
笑いもしないアヒル

もとから線一本のひとみ
少しだけ弧を描いている
ように見えるくちばし
アルカイツクスマイル
嗚呼、慈悲深い微笑み

彼はいつもいる
彼女かも知れない
ヤツはいる

逆さまに持ち運ばれて
母親に注意された子が
顔をうずめながら
上下反転
くちばしをはんだ

寂しがりやの子が
寝付けない夜中
ヤツの鼻は伸びる

黒い糸を引つ張られて
左右交互に
するする

意地っ張りな子が
寝付けない夜中
ヤツはダイエットする
お腹をギュツと締められ
回転するから
ぐるぐる

誰だつて
実はちよっぴり
うらやましい
欲しいものだよ

ヤツみたいなのは

けれどヤツは言う
やめておけよ
子どもじゃあるまい

そう言いながらも
きつとあなたのそばで
ヤツは笑つよ

ほらまた

アルカイツクスマイル

嗚呼、慈悲深い微笑み

『枕元』

居間

あなたはまだ

自分の居場所がないと
迷っていますか

居場所って
なんだろう

ほんわかしてたり
ふわふわしてたり
ほっこりだったり
あたたかだったり

感じ方なんて色々だけど
誰だってそこが
好きなはず

誰かと語らいながら
自分の居心地のいい場所
見つかるかもね

固かったソファに
座り続けたら
自分に合った形になって
好きになるかもね

居場所は
作るものじゃない

ただゆっくりと
できていくもの

月があるから

海が満ち引きするよつに

鶏がいるから

そこに卵があるよつに

ゆっくりと

周囲を囲んでいく

居場所もきつと

同じでしょう

見つけ出すのは大変で
後の幸せを信じて歩む
それは辛いことだけれど

歩んでいるあなたを
囲んでいく居場所がある

いつか気付いたら

あなたは誰かと
笑えるよ

きつと

『居間』

留守

小さい頃は
残されるのが嫌いだった
今も嫌いだけど
意味は違う

私のいない場所で
楽しいことがあるんじゃないかなんて
そんなことを考えていた
あの頃とは違う

一人取り残されて
帰ってこないんじゃないかと
考えたあのときも
きつと違う

あなたは
私のいない場所で
何をするんだろう

それだけ

待っているよ
あなたが帰ってくるまで
待っていてねと言われた

だから待つよ

帰ってくるよ

そう言われたから

待てるよ

いつまでもあなたを

あなたの帰りを望み

お土産に期待して

あなたのぬくもりを

待ち焦がれながら

私は笑って

待っているよ

おかえり

そう言って笑えば

ただいま

そう返して

笑ってもらえる

そうでしょう？

それがね

どうしようもないくらい

幸せだなんて

思えるんだ

『留守』

影響

僕がしていること

君がしていること

繋がっているようで

どうなのか分からない

僕は君に何ができるの

君は僕に何を求めるの

堕ちて、堕ちて

何処か知らない場所で

誰もいないのに

声を殺して泣いた

どうしようもない

仕方がない

そんな言葉が

大嫌いだった

警鐘を鳴らすように

頭蓋が割れるほど

痛みをくれるのは

君がいるから

僕は君に何を求めている
君は僕に何ができるの

手をかざして
壁に描いた影は

こんな自分を
嘲笑っているようだった

まるでそう

「俺に代われ」

と、言ひやうに

『影響』

梗塞

ふつと顔を上げて

息苦しさは手を伸ばす

息を遮るものは

ないはずなのに

僕はもがく

何も無い場所で

所詮、世界なんて

誰かを中心に回ってる

僕には君が

君には誰かが

誰かには僕が

中心に見えるかもよ

なんてね

僕はずっと

何も見えない場所で

声を張り上げもせず

ただ座り込んで

笑うだけ

笑つて
狂えばいいよと
囁いた

泣きながら
壊れてくれと
懇願した

僕のための君を
君のための僕に
捧げては
くれないだろうか

全て消し去った
廃墟の中
君と手を取って
笑おうと

君の眸も口も
全て君のもので
君のものじゃない

自由はなくていい
ただ、君がほしいんだ

『梗塞』

酸欠

此処にいます

あなたの場所に

いてください

私の場所に

あなたのぬくもりを

この場で感じたい

あなたの優しさに

この場で浸りたい

他には何も見えない

ただあなただけ

それで良かった

この場所でひとり

ひっそりとあなたが

消えるなら

私も隠れてしまいたい

あなたとともに

所詮私は

あなたなしでは

息をすることも叶わない

愚かだけれど

それが幸せ

私はそうやって

呼吸する

あなたに浸って

あなたを感じて

そつと

目を閉じる

あなたに包まれて

他を知らずに

眠りにつこう

目を覚まして

目に入ったあなたが

どうか

変わっていませんように

そう

願いながら

『酸欠』

距離

手を伸ばしたい
けれどあなたは
あまりにも近すぎて
この手を伸ばせば
傷つけてしまうだろう

その手を取りたくて
微笑んでみても
あなたは手など忘れて
笑い返すのだろう

此処まで来た
そのことに不満なんて
あるはずもない

此処まで来れた
これからに不安なんて
持つべきじゃない

けれど
あなたの顔すら
見えるか危ういこの場所

足を踏み外さない

どうして分かるだろう

あなたの腕すら

掴んでいるか危うい

そんな場所で

指が離れないと

どうして言えるだろう

だから私は

少し踵を返して

あなたと手を繋ぐ

寄り添ってもまだ

空白のある場所で

私たちは違うから

それが当たり前だから

だから笑おう

あなたの顔の見える

この場所で

『距離』

地平

何処までも続く

この場所で

あなたは何処を

向いて歩くのでしょうか

きっとその時

あなたの目には

私などいないのでしょうか

あなたのためと

分かったふりをして

足踏み外したのは私

だけ

けれども

私の中のあなたは

消えてはくれないの

それとも私は

隣のあなたを

突き落としていた

のでしょうか

そうだとしても

私はきつと

気付かずに笑った
ふりをする

あなたの横で
笑えぬならば
せめてあなたが
私の見えない場所で

ひっそりと永久に
笑顔でありますように

あなたの目の前で
泣けぬのならば
せめて私は
あなたの見えない場所で

ひっそり頬を
濡らしてるから

どうか
知らないふりをして

『地平』

盗み見

見ていてね

とでも言うつように

あなたが無言で晒す

それは

私を酷く拒むようだから

見はしないと

小さく呟いた

本当は見えてました

あなたの横

微笑んでみる度

だけでも私は

見ていないと

言うことしか

出来はしないのです

分かっています

あなたは

私を傷つけたくは

ないのでしょ

うけれど見たと見え

ば此処は消えるから

見てはいないと
言いながら笑うのです

あなたの嘘に
見ないふりをして
あなたは私の
嘘には気付かない

芝居なのか
本気なのか

どちらにしても
空虚なものですね

『盗み見』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0255o/>

空の果て

2010年10月17日20時28分発行